

高浜中学校だより

平成 30 年 10 月号 N06

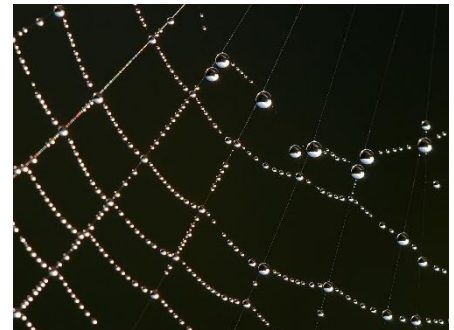
枕草子『第一二五段』

「九月ばかり、夜一夜降りあかしつる雨の、今朝はやみて、朝日いとけざやかに差し出でたるに、前栽の露はこぼるばかりぬれかかりたるも、いとおかし。透垣の羅文、軒の上などは、かいたる蜘蛛の巣のこぼれ残りたるに、雨のかかりたるが、白き玉を貫きたるやうなるこそ、いみじうあはれにをかしけれ。

少し日たけぬれば、萩などの、いと重げなるに、露の落つるに、枝うち動きて、人も手も触れぬに、ふと上ぎまへ上がりたるも、いみじうをかし。と言ひたることどもの、人に心には、つゆをかしからじと思ふこそ、またをかしけれ。」

「九月頃、一晚中降って夜明けまで続いた雨が、今朝はやんで、朝日がたいへん鮮やかに差し始めたときに、庭先に植えた草木の露はこぼれるほどにぬれかかっているのも、たいへん趣がある。透垣の羅文、軒の上などでは、張り巡らしてある蜘蛛の巣が破れ残っているところに、雨がかかったのが、(まるで) 真珠を貫き通しているようであるのは、たいそうしみじみとした感じがして趣がある。

少し日が高く昇ると、萩などが、たいへん重そうなのに、露が落ちると、枝が動いて、人も手を触れないのに、さっと上の方へ跳ね上がったのも、たいそう趣がある。と(私が)言っているいろいろなことが、(ほかの)人の心には、全く趣がないだろうと思うのが、またおもしろい。」



これは、
2年生の生徒が国語で
学習してい

る内容で、先日、授業を参観しました。先生は「この中ですてきだと思うところはどこですか」と尋ねられ、生徒は思い思いに発言していました。私も真剣に探し、選んだところは「～かいたる蜘蛛の巣のこぼれ残りたるに、雨のかかりたるが、白き玉を貫きたるやうなるこそ～」でした。

破れた蜘蛛の巣に雨がかかっている様子を、まるで真珠のように捉えられる清少納言の感性に、改めて感動させられました。同時に、こんな日常のすてきな様子を気にとめない私の鈍さも感じました。みなさんには、この学習を通して、ものを見る「感性」を養ってほしいと思います。

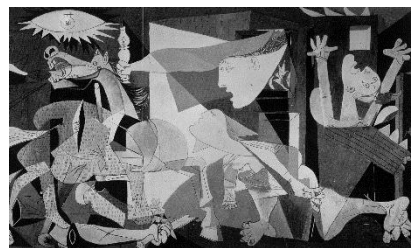
心のビタミン

本校の美術室に「美術を学ぶ人へ」という文章が掲示してあります。これは、昭和の時代に彫刻家として活躍された、佐藤忠良（さとうちゅうりょう）という人の文章です。その文章を少し紹介します。

「<前略>私たちの生活は、事実を知るだけでは成り立ちません。好きだとかきらいだとか、美しいとかみにくいか、ものに対して感ずる心があります。これはだれもが同じに感ずるものではありません。しかし、こういった感ずる心は、人間が生きていくのにとっても大切なものです。だれもが認める知識と同じに、どうしても必要なものです。

詩や音楽や美術や演劇—芸術は、こうした心が生み出したものといえましょう。この芸術というものは、科学技術とちがって、環境をかえることはできないものです。しかし、その環境にふりまわされるのではなく、自主的に環境に対面できるようになるのです。ものを変えることのできないものなど、役に立たないむだなものだと思っている人もいるでしょう。ところが、この直接役に立たないものが、心のビタミンのようなもので、しらずしらずのうちに、私たちの心のなかで蓄積されて、感ずる心を育てるのです。人が生きるためには、知ることがたいせつです。同じように感ずることが大切です。<後略>」

現代の科学の発展には目を見張るものがあります。



AI(人工知能)をはじめ、先日は、京都大学の本庶祐名誉教授が「癌免疫治療」にかかる功績が認められ、ノーベル生理学・医学賞を受賞されたことなどからもわかります。これらの科学は私たちの生き方に大きく影響を与えます。

しかし、私たちが今後生きていく社会は科学の発展ばかりでは幸せな人生は送れないのではないかということ、佐藤忠良先生はおっしゃっているように感じます。

学校は、数学、理科、社会など知識を学ぶ教科もありますが、そればかりが勉強ではありません。美術や音楽、または書道など、芸術の分野も同じように学ぶことが大切なことではないでしょうか。

今後の社会を生き抜き、幸せな人生を送るためには、「知識」を学ぶことと同じくらい「感性」を身につけることが大切だと考えます。AIに振り回されない人間になるためには「感ずる心」「感性」を養うことだと思います。

古典に学び、芸術に親しむ。そんな秋を過ごしてほしいと感じる10月です。